

經

過編

夜。隣の部屋で笑っている数人の男たちの声。それが段々静まっていき、やがて怒声、言い合いの様。不意に銃声。壁に響く鈍い音。やまぬ奇声。やがてサイレンが近づき、廊下を駆ける大勢の足音。ドアが打ち破られる音。銃声はさらに大きくなる。そして隣室からだけでなく、外でも銃声が。怒りと恐怖の叫びが入り混じって耳に飛び込む。大きな車輻が近づいてくる音。轟音とともに背後をかすめる砲弾。連続して聞こえる銃声。ヘリコプターの音も近い。四方八方を幾種もの弾が飛び交う。やがて空を切るような落下音、大爆発。間もなく上空を大きな雲が多い、雨音。その時にはもう、音はしない。それどころか、なにもない。

もと私の部屋のリビングだったところに、私は座っていた。やがて目を開けた。広大な平原。ほう。石の上に三年座っていれば、さすがに石も温かくなるという故事から生まれたらしいあのコトバ。あながち間違いではないようだ、だって座っているコンクリートの冷たさが草と土の温もりに変わっているから。コンクリートジャングルと呼ばれたしがらみの世界は終りを告げた。やっと私は自由の世界に足を踏み出せるのだ。だが立ち上がろうとした私の足は、三年間にも及ぶ座禅によって、動かなくなっていた。そうか。じゃああと三年座るか。その時にはまた、より良い世界が待っているはずだ。

なにもかもむしゃくしゃして、もう！

俺は自分が持つ超能力について予め知っていた。ある出来事の絵を描いたらすべてがその通りになる。母親と喧嘩したあと、母が死ぬ絵を描いたら、それも現実となった。その後しばらくは怖くて絵を描くことができなかった。美術の授業ではいつも空の絵を描いた。たとえデッサンの授業であっても、彫刻の授業であっても。空なら、誰にも迷惑はかからないだろう。しかし、そうでもなかった。灰色の絵の具を垂らしてしまった時があった。飛行機だということにしてごまかした。やがて飛行機事故が起き、以降それを描くのすらやめた。

やがて歳を重ねるにつれ、絵は俺の道具となった。高校の合格発表の掲示板の絵を描き、合格。テストで百点になった絵を描き、百点。好きな子とデートする絵を描き、成功。と上手くいっていた。

入社一年目を迎える日まで俺はエリートコースを進みつづけていた。しかし、予期せぬ事態。会社の倒産。予め絵に描いてなかったのが、免れられなかった。混乱のなか、親父が突然死。遺産が全部愛人に持ってかれた。絵を描くヒマがなく、これも防げず。家賃滞納。防ぐ以前に絵の具を買う金がなかった。路上を汚れた服装で力無い足取りで歩く。

なにもかもむしゃくしゃして、もう！

近くの画商から絵の具を取り上げ、近くにあった壁に塗りたいくる。世界の終わりの絵だ。死んじまえ、死んじまえ、死んじまえ、死んじまえ、なにもかも終わっちまえ！

直後の閃光と熱。これが世界の終わりだと悟った。絵に描いたとおりだ――。

やがて世界は何事もなかったかのように動きを取り戻した。彼が除かれた世界は、彼がいた時と変わらずに単調に動き続けるだろう。

いや、あながち間違っではないない。彼が知っている世界はあの時確かに終わった。説明はしづらいが、要は『彼が世界から消える絵』を誰かが描いたということなのだろう。それじゃ説明がつかないと思う人は、今一度自分のいる世界を見てみる。正しい道理は結局通用しない、間違いだらけだ。

経過編

<http://p.booklog.jp/book/75034>

著者：重長真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75034>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75034>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ